

レクリエーションの概念の限定に関する一考察

—日本の概念の限定と欧米の概念の限定にもとづいて—

片岡 曉夫 浅田 隆夫 芳賀 健治* 平井 章*

A Study of Limitation of the Concepts of Recreation

—Based on the Limitation of the Japanese “Hare” and “Ke”,
The English “Recreation”, and the German “Erholung”—

Akio KATAOKA, Takao ASADA, Kenji HAGA* and Shou HIRAI*

The object of this study is to make very clear the notion of “recreation”. The authors argued a) English and German meanings in the dictionaries and Japanese meaning according to dictionaries in educational psychology, social welfare, physical education, and b) social science. In a), the authors argued the denotations of the meanings and this discussion resulted in a general definition of “recreation” which has a special cognitive standpoint to some total life phenomenon. In b), the authors concluded in 4 dimensions of being of men which are a time-being, an activity-being, a I-myself-being, and a value being. These dimensions of beings are organized as a process of “recreation”. Then the authors argued process theories in “recreation”. These are the theory of homeo-stasis and the theory of “Hare-Ke” in the traditional Japanese sense. In homeo-stasis theory, the authors found some difficulties in transition from physiological level to psychological level and historical-cultural level. Then the authors thought that the homeo-stasis process in “recreation” is a combination of the inner developed desires and the outer developed cultural experiences of a man. This process theory is especially concerned with motivation for “recreation” which is a part of I-myself being.

The “Hare-Ke” theory was developed by Japanese cultural anthropologists who were interested in Japanese culture of ordinary men. “Hare” means, for example, special day for “recreation” and “Ke” means ordinary work day.

The authors explained this theory as being a sort of life re-structuring from the crisis of mind and body unity. From all these result, the authors outlined the “recreation” as follow.

Recreation is some phenomenon which men comprehend as some living phenomenon from a special standpoint which has some relation to the being of men as time, activity, I-myself, and value being, and a process of the re-structuring of living power in historical and cultural limitation.

In this process of “recreation”, it is the most important meaning that men re-structure their living power in the center of this process. The research of “recreation” in philosophical standpoint will be divided into men as a time-being, men as a action-being, men as a I-myself being, and men as a value-being.

* 筑波大学大学院修士課程体育研究科 (Master's Program of Physical Education, The University of Tsukuba)

一. 研究の目的

レクリエーションという概念は、いくつかの近縁語を持つ。これらの近縁語と区別してレクリエーションの概念を明確にすることはレクリエーション研究の方向を定める上で必要な前提である。概念を限定してすべての問題が解決するわけではないが研究成果を体系づけていく上からも大切なことであろう。

すでに今迄に幾多の先行研究者がそれぞれに定義を下し、あるいは意味を検討して来ている。本研究は、それらをふまえた上で、より一層明確さを上げることを目的とする。

二. 研究の方法

ある概念を限定^(注1)する場合には、内包^(注2)及び外延^(注3)についてそれぞれ明らかにすべきであろう。本論文では、特に内包の把握を目標として論を展開する。それによって、レクリエーションの普遍概念を明らかにしようとする。

すでに先行研究者がいくつもの定義^(注4)を提出しており、また専門事典等にそれぞれ特色のある定義が提示されている。また、レクリエーションが欧米語であるゆえに、英、独、仏等においていかなる意味をもつかを検討する必要がある。さらには、ある程度レクリエーションの概念が明らかになった段階において、日本語におけるレクリエーションに相当する部分を明らかにしようとする。日本においては、レクリエーションに相当する語がないとされたために、レクリエーションが直接日本語にとり入れられているが^(注5)、人間共通の普遍現象であるからには、相對等する日本の現象ないし、表現が見られるにちがいない。

以上のような様々な記述内容をレクリエーションの定義ないし意味に関係する外延として、これらに共通な内包を抽出し、あるいは、それらを統合する理論枠へと展開しようとする^(注6)。

三. 本論

1. 概観：レクリエーションは、時代背景、産業構造、社会背景によって様々な意味を与えられてきた。ジョン・ロックの「教育論」では、recre-

ation は、「気晴し、休養」の意味で使われている^(注7)。ロックの時代のイギリス民衆は、recreation を日常生活の用語として用いていた。

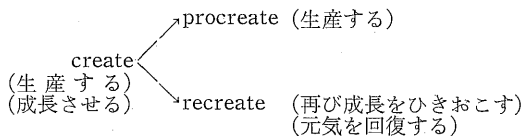
学問的に recreation という概念が用いられ、一般の人々に注目されたのは、米国の場合1930年代から以後のことであろう^(注8)。特に世界大恐慌以後、厚生的な側面、および兵士のためのレクリエーションという側面が強調されたこともあった^(注9)。この時代以後を代表するレクリエーションの理論家として、バトラーやニューメイヤーらが日本で紹介されているが、彼らの用いる recreation には、価値志向的な特色が出ている。このような意味をになって第二次大戦後の日本にレクリエーションとして導入されて来ている。そして、これら価値観は、米国の歴史的文化的背景を抜きにしては十分に理解され得ないものであり、それだけに普遍概念としてのレクリエーションを追求する場合には、その拘束を離れなければならないのである。

2. 語源的検討

語源辞典^(注10)にもとづいて調べてみると、recreation の同族語として、creation, procreation, およびその変化形(動詞、形容詞)がある。recreation は“生産すること”とか“成長をひきおこすこと”の意味を持っている。procreation は“生じさせる”や“出産する”という意味を持っている。そして、ラテン語 *Recreare* は“再び成長をひきおこす”“新しい生命を与える”の意味を持ち、従って、元気をとりもどさせるとか再び新鮮にするという意味へ展開する。

語幹としての create は、また creare とも関係する。フランス語、スペイン語、ポルトガル語などに関連する言葉で“養う”、“育てる”、あるいは、“しつける”という意味を持っている。

このように見ると、明らかに 1) create は recreate よりも基本であり、2) 上に括弧でくくった概念は相互に意味関連を持っている、3) いずれも何らかのプロセスを表わしているということができよう。これを整理すると次のようになる。



create の生産と成長は、元来非常に近い関係にあったと考えられる。たとえば牧畜文化においては、主たる生産とは家畜を成長させることであったであろうし、農業文化においても植物を成長させることが生産の主たる内容であったであろう。ヨーロッパは牧畜系統の文化に属するとされるから、上に整理した意味の関連は、遊牧的生活の中で理解されうるといえよう。また人間と家畜とが非常に近い関係にあるとすれば、これらの意味は、人にも家畜にも等しく用いられたとも考えられる。recreate もこのようにして、家畜の成長を再びひきおこしたり、家畜の元気を回復させることにも用いられたであろう。人間については養育することやしつけることにも意味が展開したと考えられる。このように、いずれの意味をとっても生物と関係した過程的概念であるといえよう。

英語の recreation は、仏語 *recreation* を介してラテン語 *recreation-em* にたどりつく。その原義は、*re-create* (再び創る) という意味だとされる。しかし、本論文では、*recreation* という概念の適用範囲がどのように広がってきたのかということを知る必要があるので、さらにくわしく調べてみた。

Oxford 英語辞典^(註11)によれば、用例ごとに最初の出典から整理されており、歴史的な概念の展開を知ることができる。以下この辞典について *recreation* の項を整理したものを示す。

まず *recreation* が仏語 *recreation* (13C, *Littérature*)、ラテン語 *recreation-em* (*pliny*) についていることが示される。しかし、*re-creation* (再創造) について調べると、その動詞形 *re-create* の用例は、1522年が最初であり、前者、すなわち *recreation* よりも用例の出現が遅いことがわかる。従って、少なくとも英語圏においては、*recreation* は *re-creation* よりも早くから使用されていたのではないかと考えられる。

次に用例であるが、第一に出現するのは、「食

事を共にすることによってリフレッシュすること、軽い飲食、(精神的影響および飲食による)元気回復、滋養」である。1390年からあらわれる。二番目は、「感覚あるいは肉体に影響を及ぼす何ものか (something) によって生み出されるリフレッシュメントあるいはこち良さ」(1390年より)、および、「心の快感あるいは慰め、快ちよくさせること、あるいは慰めること」(1410年〜)である。三番目の用例は④ the action of recreating, 楽しい時間, *pastime*, *amusement* などによって *recreate* されること (1400年〜) ⑤ *re-creating* の手段, 楽しい経験, 仕事 (1430年〜) ⑥ *recreation* を供給する人, 及び供給すること (1601年〜) などである。四番目は、回復あるいは *recreation* の場 (1440年〜) となる。

以上について、用例の提示対象を分類すると、
 1. 軽い飲食, 2. 元気回復, 3. 滋養, 4. リフレッシュメント, 5. 気持ちよさ, 6. 快感, 7. 慰め, 8. 快ちよくさせること, 9. *recreate* されること, 10. *recreating* の手段, 11. 楽しい経験, 12. 楽しい仕事, 13. *recreation* の供給者, 14. *recreation* の供給, 15. 回復の場, 16. *recreation* の場となる。すなわち、1) 物質的なもの(滋養物), 2) 行為的なもの(軽い飲食, 仕事), 3) 人 (*recreation* の供給者), 4) 場, 5) 人の状態(元気回復など), 6) その他となる。これから見るかぎり、生活空間のあらゆる側面に適用されて来た概念であることがわかる。この生活空間には物質も人の活動も経験も、さらにはそれを含む場もとりこまれている。したがって、上位概念として、様々な生活空間を考えた上で、その中の種概念としてレクリエーション的な生活空間が想定され、他の生活空間と区別するために、*recreation* 的生活空間に属するすべての構成要素に対して *recreation* という概念を持ち出すことになっている。

さらに注目すべきは、この *recreation* 的空間の原型が飲食をする生活空間にあったということである。すなわち、飲食に伴って存在し生起する様々なものや事柄が *recreation* としてとりまとめられるということである^(註12)。

そしてこの生活空間の特質は、たとえばスポー

ツの試合のように何時に開始され、何時に終るといような明確に区切られた空間ではないということであろう。それは、いわば、連続的な流れとして次第に高まり、ついで消滅していくような気配を持ったものである。これは丁度色彩のある光線のようなものともいえよう。たとえば夕陽に照らされたものはすべて赤味がかかる。しかもいつ夕やけが始まり、いつ終るかは、はっきりしていない。そして人は、いたるところにあるものに夕やけの印を見ることができ、木々を見て、木があると認識することもできるし、そこに夕やけがあると認識することもできる。すなわち認識の視点の相違によって、概念が変化することがありうるといえよう。

このように考えてくると、レクリエーションの概念として明確化されるべきものは、あらゆる物を照らす太陽光線に相当するものを求めるということになる。そしてそれは人の認識の立場にかかわっている。以上を Oxford 英語辞典からの考察結果として、次にドイツ語について調べる。

さてドイツ語では、同義語として *rekreation* となり、*recreation* と同語源である。同義語として、*Erholung* (気晴し、休養) や *Belustigung* (娯楽) があげられる。

ドイツ語の Duden (第7版)^(注13)によれば、*erholung* の動詞 *erholen* は、第1に“力を回復する”，という意味を持ち、たとえば *ich habe mich im Urlaub gut erholt* のように用いたり、芝生が雨でよみがえる場合に用いたり、取引所の値動きや株の値動きにおける勢いの回復に用いる。また、驚きや病気に打ちかつことに用いられる。第2の意味では、友人の忠告によって自己を取り戻すことに用いる。*Erholung* については、健康や成就能力の再獲得に用いられ、人間に適用される他、地力の回復などにも用いられる。

Erholung の動詞形 *erholen* は、動詞形の *holen* に *er* というものが加わって出てきたと考えられるから、概念の原形は、*holen* にもとめられよう。*holen* には、「取りに行つて持ってくる、迎へに行つてつれてくる」という意味が含まれている。*erholen* ではこれが「ある物を手に入れる、ある人に対して償いをする、ある状態から旧

に復する」などの意味になる。したがって、*Erholung* は、元来「手に入れる、取り戻す、旧に復する」という意味が含まれていることがわかる。概念構成から見れば、*rekreation* の意味の一部を *Erholung* が構成し、他の一部を *Belustigung* が構成している。*Belustigung* は、“楽しませる”や“喜ばせる”という意味であるから、*rekreation* は *lust* (愉悦、快楽) の意味を含んでくる。

以上の検討にもとづいて、*recreation* と *rekreation* を含む全体の広がり人間に固有なあるもの、いまだ未確定なものという意味で、以後 (x) と表記する。

この (x) は、人間の生活経験にもとづいて成立した認識の視点を示していた。この生活経験は、古くは成長や元氣回復の生物学的プロセスを指示した。英語では飲食物の摂取によって生じてくるようなある種の人間内部における変化に焦点をもち、独語においては、失なわれたものの取り戻し、及び愉悦であった。したがって、何かを得ることによって日常生活を継続していかせるような経験が根底にある。いわば、この何かは「人が生活を続けていくためのエネルギー」であるといえよう。もちろん、栄養だけに限ったものではなく、精神的なエネルギーも含まれる。したがって (x) は、人の充電的生活に関連すると比喩することができよう。そしてまた、休養や気晴しが「生活のエネルギーを取り戻す」ことに深く関係していることもたしかである。

3. 専門事典にみるレクリエーションの定義

教育学、心理学、社会学、体育学などの諸領域においてレクリエーションが定義され、説明されている。以下主たる事典について比較検討する。

教育心理学新辞典 (金子書房、1969年) では、広義と狭義とに分け、広義では要するに自由時間における自発的な活動の総体であり、狭義では、その総体のうち参加者を元氣づけ、健全で、生活を豊かにする活動として制限している。したがって、1) 自由時間性、2) 活動性、3) 自発性、4) 価値性の意味が含まれている。

社会科学大事典 (鹿島研究所1971年) では、1) 自由時間性、2) 自発性、3) 活動性、4) 価値

性（心身の平衡の回復と力の維持）を要素概念として含んでいる。

体育大辞典（不昧堂1977年）では、価値的立場と没価値的立場の二つが存在することを説明している。前者では価値性を中心内容とし、後者では1) 自由時間性、2) 自発性、3) 活動性を含んでいる。

社会福祉辞典（誠信書房1974年）では、1) 自由時間性、2) 自発性、3) 価値性、4) 活動性を含んでいる。

以上四つの定義について要約したところでは、要素として、1) 自由時間性、2) 自発性、3) 価値性、4) 活動性というものが共通して取り上げられている。表現上ではそれぞれが異なった事典類であるが、内容の要点では一致している。ここで出て来た四つの性質は、いずれもそれぞれの内容を検討すれば、一致することの困難な概念であり、ここにこそ定義上の問題が生じているのである。以下、上述の四つの要素概念について検討する。

①自由時間性について

自由時間の問題は、自由の概念と時間の概念について明らかにした上で理解されるものといえよう。自由についても、時間についても哲学的議論が必要であろう。要約すれば、経済学上の労働の概念と対比されるものとしての自由時間としてとらえるかどうかである。結論的に言うならば、労働時間との対比において用いる方法は、特殊な事例についてあてはまるものであり、すべての場合をこれでわりきるわけにはいかないといえよう。また、時間の概念についても、物理的時間と人間的時間を区別して議論しなければならないであろう。自由についても幾多の困難な問題につきあたるといえよう。

②活動性について

(x) を活動として見る場合、個人性との関連で困難が生じてくる。すなわち個人のその時々の状態により、また個人差により、一定の活動を特定しがたいということにつきあたる。この点について池田勝は、「……個人の動機や態度と関わりをもつ……」と述べている^(注14)。そして、この問題は、活動形式と活動選択の問題にも関係する。活

動選択は、個人の主観のおよび経験的判断と活動可能な環境との関数的関係でもある。ともあれ個人の状況が確定されにくいために(x)の選択について何らかの法則的關係を見出すこともまた困難である。

③自発性について

自発性に関する意味として、(x)は活動自体が目的であって、他から強制を受けない、というような説明がなされる。とくに現代のような大衆操作が進んだ世界において自発性とはいったい何かということがあいまいになってきている。そしてこの概念は、自由時間や活動よりも一層観念性の高い概念であり、十分な検討を要する。自由や活動の概念とも深く結びついている。

④価値性について

価値の問題は、哲学的問題として人類の長い検討がなされて来ている。このほか、経済価値や医学、心理学、など、諸科学それぞれの視点から見た価値尺度が与えられている。レクリエーションが人間の存在状態と深くかかわるゆえに、価値的側面は研究上困難なものとして除外される立場もまた生じている。さらに、従来主張されてきた(x)に内在する価値が特定の歴史的文化的制約の上で主張され、必ずしも普遍的承認を得ていないと考えられる。要するに(x)に内在する価値とは何かについての吟味が依然として課題であろう。

以上、諸定義の中で共通に含まれている四つの主要概念を要約的に見てきたが、これらは人間の存在状態としての、1) 時間的存在としての人間、2) 活動的存在としての人間、3) 主体的存在としての人間、4) 価値的存在としての人間にかかわっており、それぞれが一つの人間存在を構成している。この構成は、自由時間の流れの中で、動機における自発性、そこから生ずる活動性、そして活動の中で、あるいは活動後に生ずる価値認識ととらえられる。このように、(x)の研究は、人間研究の一分野であり、いずれの要素を欠いても成立しないものであるといえよう。

4. (x)のプロセスに関する考察

以上の考察において、(x)はプロセスに関係し、このプロセスを明確にすることが困難な仕事であるということがわかった。

従来、レクリエーションの理論とされるものは、プレイの理論と関係が深く、しばしば同一視されてきた。たとえばレクリエーションの概論にプレイの理論が述べられてきた。ホイジンガやカイヨワによるプレイの理論の発展は、それ以前のプレイの理論を一面的なものとして乗り越えた。いわば、古いプレイの理論は、レクリエーションの概念と未分化であったのであり、それらの特徴は、精力余剰説や自己表現説その他のようにプロセス的に説明することであった。これらは、いずれも一面的であるとされているゆえに(x)のプロセスについての説明もプレイの理論とは別に発展する可能性を持っていると考えられる。本論では、最近のプロセス理論から、ホメオスタシスの理論と、日本固有の理論としての“ハレ”と“ケ”の理論についてえらび検討する。

①ホメオスタシス理論

プロセスとしての(x)は、人の生活の変化に関係する。生活のあるところで(x)が生じてくる。この原因として、ホメオスタシスのモデルによる説明がなされている(注15)。

ホメオスタシスは、身体が生命を維持するのに必要な化学的バランスを絶え間なく作り続ける過程を言う。ホメオスタシスの理論によると、身体は複雑で且つ化学的な組織体としてとらえられる。ホメオスタシスは器官の構造によって制限され、器官を支配する自律神経によって支配される。したがって、ホメオスタシスとは一定の適応状態へ向って身体内のバランスが維持される過程であり、心理的には、生理的欲求を満たすように意識される過程である。

すでに、R. B. Raup は、1925年に「健康な身体は、適応過程を通してホメオスタシスの状態を維持する。このホメオスタシスの状態は絶え間なく相互作用的、つまり、動的である。」と述べている(注16)。さらに彼は、身体の欲求を満足させるメカニズムとして神経系の働きをあげ、行動を生じさせるものとしての有機体の心理状態について述べている。自己満足についても、ホメオスタシスが十分に取り戻された時に生ずるものと考えている。ゆえに不適応とはバランスの乱れとされ、有機体とその環境のホメオスタシスの乱れとされ

る。したがって、この理論では、すべての行動は自己満足及びホメオスタシス回復への動きの結果としてとらえられる。物質レベルでとらえられたホメオスタシスと心理的レベルでとらえられたホメオスタシスが区別され、二つのレベルをつなぐ論理は十分でないが、示唆にとんだ見解である。

さて、心理的ホメオスタシスを仮定すると、これが人間の行動を動機づけ、自発的に行動をおこさせるものであるゆえに、(x)の動因としてとらえられる。(x)の動因として、生理的、あるいは物質レベルと関連して生じてくる心的変化が活動経験と連合して行動を生ぜしめるのである。ここでは、自発性は身体内から生ずる内発性の要素と、それに結びついた文化的諸経験の連合ととらえられるのである。そしてバランスが再回復へとむかう。

(x)の最も目立った特徴は、環境のいろいろな変化によって失なわれた心身のバランスを回復したり、取り戻したりする、いわゆる願望達成の性質である。この性質には、行動に没入しやすいという特徴がさらに随伴する。そして、心身のホメオスタシスが常に動的であるゆえに、(x)の必要性、すなわち(x)への動因も永続的に反復し生じてくる。

このような説明モデルは、(x)が必ずしも自由時間を前提にしないことを示す。しかし労働が必然的にホメオスタシス回復の自由を拘束するという点から見れば、(x)の出現する場合は自由時間に多いと見るのが当然である。自発性についてみれば、単に人を生理的につき動かされる者として見るべきではなく、必ずしも生理的なモデルとは一致しない成就欲求や社会的に承認されたいという欲求についてもホメオスタシスのモデルを広げて見るべきであろう。活動性についてみると、(x)が何らかの活動としてとらえられるのであるから、生活全般にわたる諸活動と(x)との関係がある程度まで歴史的あるいは文化的に大きくとらえる必要であろう。ある社会の中でどのような活動が(x)としてポピュラーであったかということが、マクロに見たその時代の傾向を示すことになる。いわばこの方面では、時代の生活構造を解析することが重要である。価値性のレベルについ

てみれば、活動性からさらに一段高いところで、どのような価値観へと洗練されていったのかという問題が出てくる。ホメオスタシスの回復がいつの時代においても必要であったとすれば、それを社会的に承認し、あるいは或る範囲内に制約しようとするための価値観の形成が不可欠であったであろう。さらには時代の制約というものにおいて、(x) のテクノロジーの未成熟も価値観に投影しているであろう。しばしばレクリエーションの定義で問題とされる価値の問題も、旧制度に適した価値観から現代的価値への変化の中に出現してきたと見られる。

②ハレとケの理論

ここでは、第二次大戦後日本に入って来た recreation の概念を取扱うのではない。日本の農村において長い間伝承されてきた生活規範——ハレとケ——を(x)に相当する関係として着目し、考察を試みようとするものである。

日本の伝統的な生活規範として、ハレとケは民衆の生活の中で根強く伝承されてきた。民俗学^(注17)が明らかにしたところでは、日本の農民は、ハレとケを厳しく区別する生活態度を築いて来た。彼らの用いるケという言葉の意味は、単調な日常生活を指すのであり、これを現代風に説明すれば、単調な毎日が続くケを持続させる活力(エネルギー)が衰退しかかり、不安、攻撃性、欲求不満などがうっ積し^(注18)普通の暮らしぶりでは満足がいけない状態に陥りかかり、やがて変化を待望するようになってくる。このような過程の中で懸命に日常の単調な反復を支えているのがケの日々であろう。これを(x)の視角からみれば、(x)の前駆状態と見られよう。このような状態では、ケの持続は不可能なわけで、農民はケの生活を中断し、ハレの状態に入る。ハレの状態とは、ケの日々とは全く異なった祭りの狂騒、飲食の仕方、芝居見物、踊りなどを行なう状態を言うのである。いわば心身ともに慰楽によって飽満化する日であった。ハレの日の機能は、活力をとりもどすことであった。ハレはいわば(x)にはほぼ対等する位置を占めるといえよう。

このハレとケの対応の妙は、ある場合にはハレはケの持続のためにあり、またある場合にはケが

ハレのためにあるというような微妙な調和であり、融合一体となった生活リズムであったといえよう。つまり、ハレはケに変化をあたえ、周期的な年中行事としてのハレの日が単調な農村の生活にリズムをつけ、生産にもはずみをつけたのである。これは稲作の生産過程に依拠していた。しかし、休日がすべてハレの日ではなく、これとは別に休養を目的とした農休日もおかれていたことを注意しておかねばならない。つまり、休日には二種類あったわけで、一つは高揚した気分、興奮状態、および狂熱状態のあるダイナミックな休日であり、もう一つは静かな休養及び疲労回復(とくに肉体的な)の休日であった。つまり、動的休日と静的休日とでも表現できようか。

先述のようにハレとケの区別は厳しく、ケの日には勝手に遊んだり休んだりすることはできなかつたし、ハレの日には勝手に働くことができなかつたのである。つまり、集団的規制が強かつたのである。ちなみに、このハレとケの規則を破って遊んでいる人を道楽者とか遊び人と呼んだのである。またこれとは反対に、ハレの日に遊ぶことに対しては、勤労を重んずる儒教倫理も規制しえなかつたのである。

ハレとケの生活規範は、明治以後の急激な生活構造(とくに都市労働者)の変化によって、徐々に拘束力を失っていた。つまりハレとケが混交してしまい、ハレがケに吸収され、平準化されてしまったのである。ここで農民の生活の智慧としてのハレとケの対応の妙は失なわれていく。ハレが失なわれ、ケの拘束力だけが残された時、人々は熱心に働きつつ疲れきっていくのみであった。都市の労働者にとって、ハレの消滅によって「生活に変化を与える場」「活力をとりもどすための場」は著しく制約されてしまったのである^(注19)。現代史的な考察は別にとり扱うこととし、ハレとケについてももう少し(x)との関連を検討する。

ケという概念は農作物を成長させる根源的なエネルギーをさし、さらには農民の労働の活力源をもケと呼ぶようになったことを桜井徳太郎は示している。さらに桜井は、ケの活力が減退した状態をケガレ、すなわち気が枯れた状態とみた^(注20)。いわばケガレとは(x)の前駆状態を指す概念と見

ることができる。したがって、(x) の過程としてケ→ケガレ→ハレ→ケというサイクルを考えることができる。ケを労働の活力源としてみるならば、図1のように表わすことができよう。

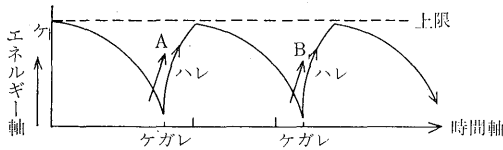


図1 (x) の過程としてのハレとケとケガレ

図の矢印AやBを示す概念は日本語には見あたらないようである^(注21)。しかし、生活構成としてのハレとケの中に組み入れられているといえよう。re-creation や Erholung はこの矢印AやBを示す概念といえよう。

ハレの機能は、なぜ活力を再びとりもどさせるのであろうか。それはケガレの状態における不安、攻撃性、欲求不満などの人格的危機状態を再構成し、生命力をとりもどさせるからであろう。それは単なる排泄作用ではなく、何ものかをとり込んで修復し、再構成するようなはたらきであろう。そのために集中し、狂熱化すると考えられる。再構成のために心身のエネルギーが向けられるのである。それゆえに単なる農休日とは区別されるといえよう。

四. 考察および結論

本論の2、語源的考察においては、(x) が生物学的プロセスを意味することから発展し、英語圏では飲食物の摂取の生活空間に生じてくるような経験を象徴することを起源的現象としてもち、人の充電的生活に関連すると比喩的に把握された。これは肉体のレベルにも感覚のレベルにも適用される。さらには精神のレベルにも関連する。つまり、物質、行為、人、人の状態などにすべて(x)が、適用されている。したがって、(x)を、あらゆる生活現象に対して、特別な認識視点からとらえたものと考えた。

本論の3、専門事典にもとづく検討においては、自由時間性、自発性、価値性、活動性という

共通的四要素概念が抽出された。ここから、時間的存在としての人間、活動的存在としての人間、主体的存在としての人間、価値的存在としての人間という人間存在の四側面が問題とされた。この四側面がプロセスとして構成されうると考えられた。

本論4では、プロセスの理論として、ホメオスタシス理論とハレとケの理論とをとり上げた。ホメオスタシス理論は(x)における自発性の問題とくに関係していることを見た。そして、人間の内部から生ずる内発性の要素とそれに結びついた文化的諸活動の経験の連合として(x)がとらえられると述べた。ハレとケの理論においては、心身の危機状態からの生命力の再構成過程として把握された。

したがって、これらの結果を総括すれば、(x)は、「ある生活現象を特別な視点からとらえたものであり、その現象は、時間的、活動的、主体的、価値的な人間存在の側面と関係し、そして、歴史的文化的制約の中で、生命力を再構成する過程としてとらえられるものである」といえよう。

したがって、中心過程としては、生命力の再構成が上げられるのであり、この焦点に向って、歴史的文化的制約に働きかけ、時間的側面、主体性の側面、活動性の側面、価値性の側面から人間存在における検討をしていくことに研究課題が生じてくるといえよう。

注

注1 概念の限定について：概念とは哲学においては、「ある多くの事物のもつきまざまな特徴のなかから取りだされてきた。それらの事物が他の事物から明瞭に区別されるような本質的な諸特徴」を内容にもつことばと解される、(平凡社、哲学事典)。しかし、一般的に概念は必ずしも明瞭になっていないことが多い。したがって、概念を限定し、境界をきめ曖昧さをとりのぞく必要がある。これは「ある思维対象の本質または領域をきめることを意味する。」(同 p. 456)。したがって、「ある概念を限定することは、その上位概念に種差をくわえること(すなわち定義すること)、あるいは新しい性質をくわえてその外延を小さくすることを意味する。」といわれる。

注2 概念の意味内容。

注3 ある概念の適用範囲。

注4 定義について：ここでは、レクリエーション

という概念をより一層明瞭にするために従来行なわれて来た定義を他の新しい言葉でおきかえて限定しようとしている。

注 5 仲村 要, 岡本包治, 小田切毅一, 齋田碩哉, 「現代におけるレクリエーションの意味」, レクリエーション体系 I, レクリエーションと現代, 所収, 不昧堂, p. 212~253, 1976年。

注 6 小田切毅一「レクリエーションの構造論——(内包)をめぐる論議」, レクリエーション研究, 第一号, p. 1~7, 1971年。

齋田碩哉「レクリエーションの構造論——(外延)をめぐる」, 前出レクリエーション研究, 第一号所収, p. 8~18.

片岡暁夫「レクリエーションの構造論——(内包と外延)をとりまくもの」, 前出レクリエーション研究, 第一号所収, p. 19~26.

注 7 ジョン・ロック, 梅崎光生訳, 教育論, 世界教育学選集, 明治図書, 1977年, p. 125, p. 155, p. 240~243.

注 8, 9 江橋慎四郎, 池田 勝「レクリエーション研究序説」, 前出レクリエーション体系 III 所収, p. 11~22.

注 10 ORIGINS A Short Etymological Dictionary of Modern English, by Eric Partridge, Routledge & Kegan Paul.

注 11 Oxford English Dictionary Publish, *Oxford English Dictionary*, p. 275, 1970年。

注 12 日本の農村においても, 共同飲食は重要な娯楽の要素であった。

注 13 DUDEN Das große Wörterbuch deutschen Sprache, sechs Bänden.

Herausgegeben und bearbeitet vom Wissenschaftlichen Rat und den Mitarbeitern der Dudenredaktion unter Leitung von Günther Drosdowski. Bibliographisches Institut Mannheim.

Dudenverlag.

注 14 池田 勝「レクリエーション」——辞典類にみられる概念規定——: 雑誌, レクリエーション, 49巻号, p. 18, 1964年。

注 15 J.S. シーバースが彼の著書, *Principle and*

Practice of Recreational Service, Macmillan Company, p. 58~62, 1967年で論求を試みている。

注 16 R. B. Raup: *Complacency-Foundation of Human Behavior*, Macmillan Company, p. 42, 1925年。

注 17 ハレとケに関しては次の文献を参照した。

桜井徳太郎 結衆の原点 思想の冒険所収, 筑摩書房, 1974年。

鶴見和子 漂泊と定住と—柳田国男の社会変動論—初版, p. 213~218, 筑摩書房, 1977年。

直江広治 日本人の生活秩序, 柳田国男篇, 日本人所収, p. 86~116, 毎日新聞社, 1976年。

直江広治 ハレとケの混乱, 柳田国男編, 明治文化史第13巻風俗編, 第一版, p. 13~17, 洋々社, 1954年。

宮田 登 暮らしのリズムと信仰, 桜井徳太郎編, 日本民俗学講座 3, 信仰伝承所収, 朝倉書店, 1976年。

柳田国男 本論では主に「年中行事覚書」定本柳田国男集第13巻, 筑摩書房, 「明治大正史世相編」同24巻を参照した。しかし, ハレとケについて, あるいは楽しみについては, 定本柳田国男集第1巻から第31巻まで各所にみられ, 枚挙にいとまがないので省略した。

和歌森太郎編, 日本民俗学講座 4, 芸能伝承, 朝倉書店 1976年。

和歌森太郎 神ごとの中の日本人, 初版, 弘文堂, 1977年。

和歌森太郎 民俗歳事記, (初版第4刷), 岩崎美術社, 1975年。

注 18 堀 一郎 日本のシャーマニズム, 初版, 講談社, 1974年。

注 19 特に下層の人々についていえる。このような社会背景のもとで, 権田保之助らの民衆娯楽論が展開されていった。ここでは次の文献を参照した。

権田保之助 民衆娯楽論, 初版, 巖松堂書店, 1931年。

権田保之助 娯楽教育の研究, 初版, 小学館1943年。

注 20 前出注17桜井参照。

注 21 日本語では, 「気晴らし」という言葉があるが, 厳格なハレとケの区別が失なわれた今日においては, その本来の意味が極めて希薄なものとなってしまった。